



「見たり、聞いたり、探ったり」No.250

通算 No.402

青木行雄

日本人の応援歌を作り続けた国民的
作曲家「古関裕而」の生涯

「彼の名前は知らなくても、彼の作った曲を聴いたことのない日本人はいない」といわれるほどの国民的大作曲家、2020年NHK朝ドラの主人公のモデルとしても注目を集めた「古関裕而」、この歌を聞くと、今でも心にジーンとくる曲が何曲かある。

「古関裕而」がどんな作曲家なのか順を追って記してみる。

この日本を代表する作曲家・古関裕而は、1909年(明治42年)8月11日、福島市大町にある市内有数の呉服店「喜多三」で生まれた。音楽好きだった父は、大正初期では珍しい蓄音機を購入し、余暇には主に浪曲のレコードをかけていた。これが古関裕而の音楽との出会いである。古関は民謡や吹奏楽が好きで、小学校の頃から作曲を始めるようになった。

古関は自伝の中で「教室の中ではおとなしく目立たない存在だったが、作曲となると夢中になるので、次第にクラスメートは詩を書いて、私のところに持ってくるようになった。頼まれるから人の分まで作る。できると楽しい。そんな繰り返しで知らず知らずのうちに作曲することに親しんでいった」と記している。

1922年(大正11年)、古関は福島県立福島商業学校に入学、家業である呉服店を継ぐためでしたが、第一次世界大戦終結の影響で日本は大変なインフレとなり家業をたたむことになった。しかし、ソロバンの玉よりも音符のタマの方が好きだった古関は、山田耕筰の曲に多大な影響を受けながら作曲に熱中するようになっていく。卒業するころには「福島ハーモニカ・ソサイティー」への入会や、音楽会などへ通うようになり、古関は洋楽のドビュッシーやストラビンスキー、ムソルグスキーの曲と出会い強烈な衝撃を受けた。以来、近代フランスやロシアの音楽に夢中になっていく。



作曲家になった青年時代 古関裕而の容姿

商業学校を卒業した古関は、音楽学校進学を夢見ながらもその決心がつかず、2年程ぶらぶら過ぎたある日、川俣銀行

で頭取をしていた伯父武藤茂平から、うちの銀行に勤めないかと声をかけられ、行員として勤めることになった。

銀行のある川俣町は福島市から20kmほど東にあり、絹の産地である。小さな町の銀行で古関は、大きな帳簿の間に五線紙を挟んでは、愛唱していた北原白秋や三木露風の詩集の中から好きな詩を選んで作曲したりしていた。銀行には勤めたものの、それまで以上に音楽熱は高揚していったという。

古関はその後、一大決心をして学生時代から憧れであった山田耕筰に作品を送り、数回手紙の往復をおこない、これが後に、古関の人生に大きな転機をもたらすことになる。また川俣銀行時代とその直後、古関にとって大きな出来事が起こった。一つは、ロンドン・チェスター楽譜出版社募集のコンクールでの「竹取物語」(他4曲)2位入選、二つ目は、「竹取物語」2位入選の新聞記事が縁で、愛知県豊橋市の内山金子と文通し、出会いからわずか半年で電撃的な結婚をしたことである。

1929年(昭和4年)7月にロンドンに送った舞踊組曲「竹取物語」(他4曲)は世界中の一流作家をしのいでの2位入選となり、作曲家古関裕而の誕生であった。

当時の新聞ではセンセーショナルに取り上げられ、伝統と学歴を重視する日本音楽界の中で前代未聞の出来事としてとらえられた。古関は「竹取物語」の概略と内容構成を「福島商業学校五年生の時より始めて昨年5月完成。作曲の動機。5年ほど前レコードでストラビンスキーの「火の鳥」の組曲を聞いて、それからヒントを得、我が国に存在する古代物語中最古の、有名な『竹取物語(かぐや姫)』に取材した。」と話している。

この受賞で、イギリスへの音楽留学が約束されたが、実家の経済状況、そして内山金子との結婚のため断念せざるをえなかった。

その後、1930年(昭和5年)の夏、古関に日本コロンビアから専属作曲家の朗報が飛び込んで来た。かつて手紙のやり取りの縁があった山田耕筰の推薦で、山田耕筰はコロンビアの専属作曲家であり顧問でもあった。

1931年(昭和6年)の5月に第1回発売のレコードの話がまとまり、古関の同郷で先輩、のちにコロンビア専属作詞家になった野村俊夫とかつて制作した「福島行進曲」がデビュー曲として選ばれた。「記念すべきデビュー曲は故郷に捧げるつもりであった」と自伝で述べている。また、最初のレコードの裏面も郷里に関するもので「福島夜曲(セレナーデ)」が選ばれた。この曲は、福島で竹下夢二展が開かれたときに、竹下夢二が福島滞在中に作った詩に曲をつけたものである。

デビュー曲は期待とは裏腹に売り上げが伸びなかったが、入社5年目の1935年(昭和10年)、大海の豪

快な漁師を想う「船頭可愛や」が庶民の心を捉え大ヒットしたのである。

その後、満州事変や二度にわたる世界大戦という激動の時代、古関は「戦時歌謡」を数々残している。

現在は、戦時歌謡など「軍歌」や「軍事歌謡」と呼ぶが、古関の曲は国民の心情から生まれたもので、軍の命令で制作された「軍歌」とは異なっている。しかし、当時は質実剛健、富国強兵が当たり前とされていた時代であり、「むしろ自分の職を通じて国運の勝利や栄えを祈る態度が正しいと思っていた」と古関は振り返っている。

古関は戦地や戦跡に慰問し、その悲惨さをまざまざと目にしてきた。それらの経験が「露営の歌」や「暁に祈る」の作曲に繋がった。古関は、自分が作曲した戦時歌謡によって兵士が戦いの疲れをいやし、気持ちや和み励まされることを願っていた。

1938年(昭和13年)8月に中支派遣軍慰問団の一員として中国の九江で軍楽隊の演奏会に出席し「露営の歌」の作曲者として挨拶を求められたとき「兵士達が無事に帰ることを肉親は祈っており、はたしてその中の何人が帰れるのかと思うと、万感が胸に迫り、絶句して一言もしゃべれなくなり、ただ涙があふれてきた」(自伝)という。古関の作る戦時歌謡は、国民の士気を鼓舞する勇猛な軍歌というより、兵士たちに寄り添い慰め、戦争により犠牲となった人々を応援し続けるエールだったのである。

1949年(昭和24年)4月、歌謡曲「長崎の鐘」がコロンビアから発売された。これは永井隆著のベストセラー「長崎の鐘」や「この子を残して」をモチーフに創作されたものである。

長崎医科大学レントゲン科助教授として勤務していた敬虔なカトリック教徒の永井隆博士は、長年にわたって放射線を浴びた後遺症として慢性骨髄性白血病に侵され、その後長崎への原爆投下によって被爆する。最愛の妻を原爆で失いながらも、被爆者の救助活動に従事した永井に感銘を受け、古関は「長崎だけでなく、この戦災の受難者全員に通じる歌だと感じ、打ちひしがれた人々のために再起を願って、『なぐさめ』の部分から長調に転じて力強く歌い上げた」と述べている。

朝ドラ「エール」の中で古関は長崎の現地で現場を見て、永井博士に病床で会見し、現況を把握しながら「長崎の鐘」は誕生するが、永井博士を演ずる吉岡秀隆氏と、古関を演じた窪田正孝氏とのやりとりには演技力の上手さと内容に大変感動したドラマであった。



古関裕而 作曲の情景



朝ドラの中、古関裕而を演じる、窪田正孝氏



朝ドラの中 オリンピックの会場で我が曲を初めて聞き感動する古関（演ずる窪田氏）と妻、音



朝ドラの中で、作曲の完成を祝い満足そうにマイクの前で話す古関（演ずる窪田氏）



朝ドラ「エール」進行中に新型コロナウイルスで亡くなられた作曲家大御所役の「志村けん氏」

永井博士はこの曲を大変喜び、古関と何回か書簡のやりとりを重ねる中で、1949年（昭和24年）の終戦記念日に、病床の中で自ら編んだ木綿製のロザリオと、短歌を添えたマリア像の墨絵の奉書を贈った。古関も、その短歌に曲を付けて返事を返したと書かれている。

この「長崎の鐘」は格調高く、人間性にあふれた歌は高く評価され、今でも長崎市民にとって、特別な歌として親しまれているという。戦前生まれの私にとっても、この歌を聞くと、心にジーンと伝わり、思わず涙ぐみそうになる歌である。

古関は劇作家・菊田一夫とラジオドラマ「山から来た男」を皮切りに、菊田から音楽を依頼されるようになり、放送、演劇等、二人三脚で36年間コンビを組んで活動した。菊田一夫は明治41年、神奈川県横浜市の生まれで、劇作家として活躍していたが、戦後NHKラジオドラマの執筆に係わり、「鐘の鳴る丘」、「さくらんぼ大将」など、古関の音楽とともに戦争の惨禍による荒廃した時代に、聴く人々への希望を抱かせる作品を発表していった。

終戦を迎えたとはいっても、戦災で父母を失った子供たちが巷にあふれ、誰しもが食糧難で生きること

に精一杯だった昭和22年7月、戦災孤児、浮浪児救済のキャンペーンのため「鐘の鳴る丘」の放送が開始された。戦後の苦しみの中にあつた人々の心に温かい人間性を呼び戻したこの作品は大反響を呼び、放送は週2回から週5回に増え、3年6ヶ月790回にわたつた。菊田の音楽効果をねらう要求は日に日に細かくなり、当時は生放送であつたため即興曲のようなことにもなつたが古関が演奏に重用していた Hammond オルガンの、即座に音色を変えられ、2億数千万種の音色が出せる機能が存分に発揮されたという。

その後、「鐘の鳴る丘」で成功をおさめ、引き続き、1951年(昭和26年)放送の「さくらんぼ大将」も大人気となつた。

この古関・菊田コンビは1973年(昭和48年)菊田の死により、解消された。

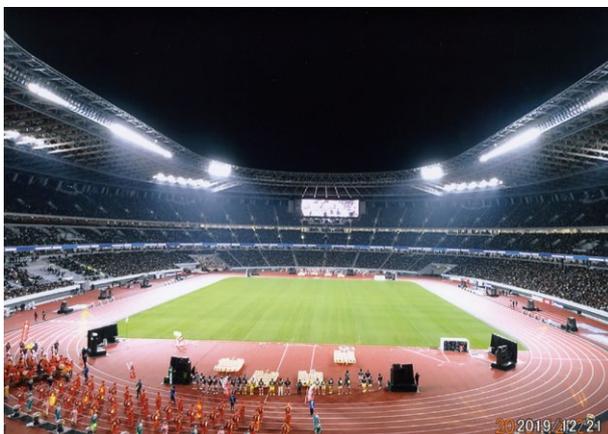
1964年(昭和39年)10月10日に、アジア初の東京オリンピック開催が決まつた時、古関は長年の作曲活動を高く評価され、「オリンピックマーチ」の作曲を政府より依頼された。

古関は「私の長い作曲生活の中で、ライフワークというべきもので、一世一代の作として精魂込めて作曲した。華やかな舞台を盛り立てるふさわしいものと自負している」と語っている。

オリンピックという最高の舞台で古関の美しい旋律が開花し、ここに世界的な作曲家・古関裕而が誕生したのである。

歌い継がれる不滅の古関メロディー

古関が誕生して100年以上が経つた現在でも、古関メロディーは私たちに歌い継がれている。生涯に5,000曲も作曲したという。2019年(令和元年)12月27日に新国立競技場がこけら落としのイベントがあり、東北の祭りが一同に会した。その時、古関の生地、福島県の夏の風物詩、長さ12m、重さ2tもある大わらじを奉納する「福島わらじまつり」も参加していた、勇壮で、にぎやかに、神輿ならぬ、わらじを大勢で担ぐ容姿もゆかいで見たが、この「わらじ音頭」も古関の手によるものという。



新国立競技場、旧国立競技場でオリンピックが開催され、その時、「オリンピックマーチ」を作曲した古関



新国立競技場のこけら落としの時、福島市より、「わらじ祭り」に使うわらじを持ちこんで、祝ったこの歌を古関が作曲した。長さ12m、重さ2t、約50人が担いでいる

こんな歌も古関メロディーである。

船頭可愛や	音丸
暁に祈る	伊藤久男
長崎の鐘	藤山一郎
イヨマンテの夜	伊藤久男
高原列車は行く	岡本敦郎
とんがり帽子	川田正子
君の名は	島田祐子
巨人軍の歌	三鷹 淳
紺碧の空	早稲田大学クラブ
モスラの歌	ザ・ピーナッツ
六甲おろし	若山 彰
穂高よさらば	芹 洋子

全部で5,000曲もあるという。

少々長々と記して来たが、2020年(令和2年)NHK朝ドラで取り上げられ見る内に興味を持ち記してみた。簡単にプロフィールをまとめてみた。

古関裕而プロフィール

本 名 古関勇治

生年月日 1909年(明治42年)8月11日

出身地 福島県福島市大町

NHK連続テレビ小説「エール」の主人公のモデルになった国民的作曲家・古関裕而は、明治42(1909)年、福島市で呉服屋の長男として生れた。幼少の頃、父親が買った蓄音機でレコードを聴き、10歳の時卓上ピアノで作曲を始めた。福島商業学校を卒業後は、親戚が経営する銀行に勤務しながら音楽家をめざす。

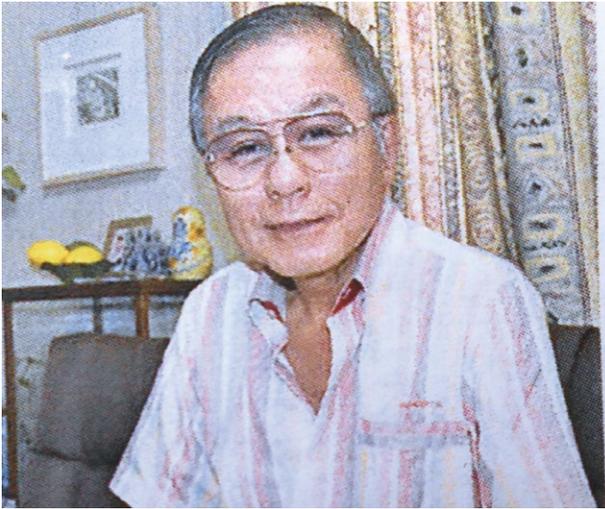
昭和5(1930)年、上京してコロムビアと専属契約を結び作曲家としてスタートする。

昭和12(1937)年に「露營の歌」を、昭和15(1940)年に名作「暁に祈る」を作曲、勇壮なメロディーで戦時歌謡としての色合いが強く、戦争協力者として非難を受けたこともあった。

昭和23(1948)年、夏の高校野球のテーマ「栄冠は君に輝く」を、翌年に「長崎の鐘」を作曲、昭和27(1952)年にはNHKラジオの連続ドラマ「君の名は」の放送が始まり、茶の間の人気を集めた。

ほかに「夢淡き東京」「イヨマンテの夜」「黒百合の歌」などの歌謡曲のヒットや、阪神タイガースの応援歌「六甲おろし」など応援歌も多く作曲した。

以降、平成元(1989)年8月18日に80歳でその生涯を閉じるまでに5,000曲もの作品を残し、昭和を代表する作曲家となったのである。



古関裕而の長男
古関正裕氏である。古関作品を語る本人



いかにも満足した作曲家として成功された、晩年の容姿

受賞は「勲三等瑞宝章」

福島市名誉市民

2020年(令和2年)春からの朝ドラ「エール」のモデルとして放送されたが、ドラマの中では、お子さんは女の子1人だが、古関には2女1男で長男「正裕」は戦後生まれで健在である。

数々のヒット曲を世に送り出し、5,000曲もの作曲をし、戦後、国民のすさんだ心をなぐさめてくれた。その中の曲「長崎の鐘」等は代表曲と言えるのではなかろうか。そして昭和39年「オリンピックマーチ」曲、等々、故、「古関裕而」に大エールを送りたい。

参与資料

古関裕而のまち福島市パンフレット

ウィキペディア

NHK

「長男・古関正裕さんに聞く」より

2020年12月20日記